
桜紙

国後旺

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜紙

【Nコード】

N7573G

【作者名】

国後旺

【あらすじ】

ああ、もお駄目だ。この軀はもお、使いものにならない。うふふ。もお。うふふふふふふ。

白船が灰色の川を流れていく。

幾分いつもより、空は青い。

桜色の紙が空から剥がれていく。

指の先が桜の花びら、桜の紙を撫でる。

船から上半身を乗り出して、灰を吸い終えた灰色の川に浮かぶ桜紙、その中心部分を、指先で撫でる。すると川が紙を濡らし、桜紙は紙らしく、綿よりも柔らかそうに破れて、川の底へ溶けるように沈んでいった。

微笑み以外の表情を浮かべた人の、白い腕を沈めながら船が進む。前へ進む度、川に引き傷のような波が立つ。その先の空に、ヒラリ舞うのは桜紙だ。舞終えた其れが川の何処かで、波をたてながら干切れていく。その人の指には、撫でられることも無かったのに。しかしまだ僅かな空気を含めて、川の水面に浮かんでいる。

その人は溶けるように涙を流し、涙がなぞった頬に、私の指が跡を追って拭きあげたあと、その人の目を見た。

桜紙が疲れを取るように、灰色の川を波立てる。

白船は引き傷を更に強く掻き付ける。波は勢いを増していた。風にも息を吹かれてしまう。青い空も陰る。未だ沈んだままの腕も、引き傷を強く掻き付ける。雪のような灰は未だに舞う。

その人はもう一方の手で、白濁酒を器から直接口にする。その人は灰にまみれて、船は灰にまみれて、私は灰にまみれて、その人はカラダを小さく丸めた。白船は引き傷を更に強く掻き付ける。引き傷を掻き付けるのは白船だけ。その人は涙を流している。船の上で空に雲。灰色の川。耳に灰の水。

肩上に、桜紙。

溶ける涙。

(視点変更)

春暖。薄桃色の若桜の花びらが、水を吸い上げた柔らかな紙のよう
に地面にペタリペタリと張り付いた。この時期。沢山の人が湖に
出掛け、その湖に浮かぶ死者に死者に成り下がる。毎年、春暖での
ことだ。

湖の周りを斑に囲む桜木。その湖の横に小屋が一つある。中には
一匹の猫がいたが、指で輪ゴムを弾くように、俊敏な動きで扉から
外へと逃げた。私が、人が来たからだ。この小屋には随分と前から
誰も住んでいない。この時期、沢山の人が湖で死ぬようになってか
らだ。元、小屋の主は恐ろしく思い、腰を引かして逃げた。次日、
その主も死んだ。逃げたはずの湖に浸りながら。

私は不思議に思いながらも、村で流れるその噂を聞き流そうとし
ていた。きつと自分には何の得にもならないだろうからだ。しかし
私は次日、聞き流すすべを忘れた。私の恋人が湖で浮かんでいたら
しいからだ。誰かが、そう言っていた。

深夜零時。私のカラダは寒さや何やらで小刻みに震えていた。そ
れに合わせ、私が座っているボロ小屋のボロ椅子がギシギシと音を
立てる。膝はカクカクと震える。

私が今ここにいるのは、死者がどう生まれるのかを知るためだ。
誰かに殺されたか、自殺。それとも。

はつきりさせたかった。だから私はここで、見張る。チツチツチ
ツツチツチツツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチ
ツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチ
ツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチ
ツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチ
音だけが響く。

曇ったガラス戸。指でなぞると外が見える。白い息に赤く白い指。
冷えたカラダ。冷えた小屋。曇ったガラス窓。指でなぞると外が見
える。

湖が見える。空の色は薄桃色。今は朝らしい。

眠気に満ちた瞳。重くて瞼が下りてしまふ。体が前かがみになる。

（視点変更、誰かの視点）

山の近くには、雪のような火山灰が降る。

山の近くに湖がある。小屋は灰にまみれていて、美しい。この近辺の灰は雪のように白い灰が降る。それも小さい。細かな粉雪が舞い、寒さが身にしむような。しかし灰だ。自然の死骸だ。吸いすぎれば命も地面に落ちるのだ……桜紙とともに。

だからこそ。湖、山中、そこで防灰マスクを付けないといけない。これは何もないときの数倍は防げるのだ。しかし今、気付くとマスクをいつの間にか無くしていた。

ずっとはめていたハズだ。いつの間にか無くしてた。

カラダに力が入らない。これはなんだ。私を浮かす、この灰色の水は……。

湖。

私の近くにくる音。震える音。いや違う。湖を震わす音。船の音。白い船が近づいてきた。乗っていた人は足をぱしゃり、ぱしゃりと湖に沈めたりしていた。

私の眼前には美しい顔がある。女の顔は灰よりも白き、白き顔である。背景、青々としたシンの空。女の顔。それは私の大切な人と同じ顔だった。そして女は先に、湖深くに沈んだいった。

ああ。灰は愛を呼び出したのだ。

私も湖の水を口に含み、沈んでいった。ついでに手のひらに何枚か、桜紙を掴んでおいた。さあ。沈もう。

（視点変更、元の視点）

見た。

見てしまった。死体がどうやって生まれるか。それは誰かから殺

されている訳でも、自殺という訳でもなかった。湖から浮かんでくるのだ、人が。

そして。霧にまみれた湖の奥、そこから船で来た白装束の黒髪の長い女、遠くから見ても分かった。それは私が、愛した人だ。

私は瞼が千切れそうなくらい目を見開いて、一部始終を見た。小屋の中で、小刻みに震えながら、見終えた。

翌日。村人に湖で見たものを話したが、しかし誰も信じはしなかった。無理もない。私もこの目で見なければ、おそらく信じはしないはずだ、「そんなことは有り得ない」と。

信じてくれぬなら。さびれた村の、さびれた村人には、アテにできない。

だから私は、一人で立ち向かう。私には名前が無い。

誰も私の名前を呼ばないから。

私には名前が無い。

必要無いと思ったから。

どうしようも無いとき出す名前。

名無し。名無し。全て名無し。

名無しと名乗って去っていく。

ナナシさん。ああ、ナナシさん。

私の名前を呼ぶ人よ。

私の前にはいないのよ。

私の前にいてくれた人よ。

もうどこにもいないのよ。

いいえ。いいえ。いましたよ。

沈んで沈んでいったんです。

沈んでいったんです。

深く深く深く深く深く深く。

湖は死体だらけなのだ。ぷかありぷかりと、いつも死体は数体浮いている、水に揺れながら。

ちなみに死体を放置するということは、非道徳的行為ではあるが、葬らない理由はちゃんとある。怖いからだ。また、怖い理由もちやんとある。

実は一度だけ葬られたことがあるのだ。初めて湖に現れた死者、それが葬られたのだ。そして葬った者が、二番目の死者となったというのが理由である。今や、その二番目の死者もどこへやらだ。

人々は恐れた。葬れば死ぬ。葬れば死。死、死、死、死。

だから、それ以後に生まれた死者は放ったまま、湖に浮かんだままなのだ。

それらを一つ一つ見ていこう、じっくりじっくり見ていこうと思う。それがなにかのヒントになるかもしれない。だから見にいこう。さあ湖に行こう。

湖に行くには――。

ぺちやりぺちやりと音がする。湿り気のある地面を踏んだのだ。ぺちやりぺちやりと音がする。雨も地面を踏んだのだ。灰が混じった灰雨なのだ。

湖が霧に抱かれながらも微かに見える水面には、意外なことに死体が溢れてはいない。ポツポツポツといくらいで、不思議なことに、溢れてはいないのだ。

湖の中の、魚のせいかな？

いやいや。ならば骨があろう。あ。いや骨ならば、沈むだろう。

あ。いやそれ以前に、この湖は死体を呑み込むのだったか。なぜに

呑み込むのだろうか？

とりあえず、沖の一番近くにある死体を取り上げて、見てみることにした。しかし、直接その中へ入り取り上げるのは、どこか気味悪い。何故なら湖は灰を吸い、白濁としていたからだ。入らずにすむもの、なにか丁度良いものは無いか、と不意に下を向くと、丁度良いことに、枝ばさみが落ちていた。それを使い、死体の胸倉を掴みあげることにした。何度も何度も水面を蹴ってしまう。何十と掴み掴みを試みて、襟を掴むことになんとか成功し、そのまま引き上げた。そのときに不思議に思ったのは、引き上げても死体から水の滴る音が聞こえなかったことだ。更に不思議なことに死体の服は少しも濡れてはいず、カラカラに渴いているのだ。なにか、不味いものを引き上げてしまった気がして、実際、不味いものだった。

その死体は偶然にも昨日の男であった。なにが不味いつて、死ぬシーンを目の当たりにしているからである。髪は短髪、背は小さめ、瞳孔を開ききつていて、灰がつまって目が灰色になっていて、そのことにも胸がム力ついた。

今も肩に降りかかるそれが急に怖くなり、口から煙のように出てくる息にすら恐怖した。心拍数が嫌なことになっている。が、そんなことになっても、死体の肩は離さなかった。恐怖の対象でも、苦勞して手に入れたものを、やすやす棄てるわけにはいかない。そんなときだ。

げほつ。

死体であるはずの男から、咳がもれた。白い頬をしていて、濁った涙を流しながら、灰眼はこちらを睨んでいた。その姿は、人間の形をした闇である。

ああ、今思えば、沈むのが普通なのだ。服を着た死体が浮かぶなんて、有り得ない。今そんなことを考えている暇が無いと分かっているが、頭が冷静に混乱していたのでは仕方がない。ああ矛盾。闇は私の首を強く絞めた。その腕を私はズボンのポケットに入れておいたナイフで刺した。ぐりぐりと少しずつ、深く深くへと。腕

のどこを刺したのかを見る余裕は無かった。闇を振りほどいて闇を蹴る。怯んだのが分かると、私の足はただただ逃げ道を探していた。ただ、村へと向かう道を走った。途中、何度か足をぐねったが、必死に走った。吐く息が顔にぶつかり吐き気がする。

数時間後、ボロボロの躰は村に着いた。

薄桃色の空が、朝を示していた。私は恐怖から逃れたのだ。

畑仕事をしている村人がいる。そうだ。こいつに話そう。きっと信じてくれる。あんなにも恐ろしい存在だ。きっと信じてくれる。

私は。私は。見たのだ。あれがゾンビとかゆう奴なのだ。ああ恐ろしい。思い出すのも恐ろしい。もおイヤだ。二度と行くもんか。

口を開いて、無茶苦茶な頭を冷静にするために深呼吸をした。

その瞬間、胸が膨れ上がり破裂した。

（視点変更、村人視点）

それはそれはもお恐ろしい光景ですよ。胸に大きなナイフが刺さった、薄汚れた男が話しかけてきたんですから。怖くて怖くて動けませんでしたよ。

そしたら『ソレ』が急にぶっ倒れましてね、血をぶわーって口から吐き出してね、もお訳分かりませんでしたよ。

もお、いいですかね。なんだか話してて気持ちが悪くなりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7573g/>

桜紙

2010年10月9日13時28分発行